

講話者プロフィール(被爆者)

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
小峰 秀孝	こみね ひでたか	4歳

4才のとき、爆心地から1.5km離れた自宅近くの畑で被爆しました。

両手、両足、お腹を火傷し、足は3回手術を受けました。右足首は曲がらず、横歩きで小学校に通学しました。「腐れ足」「鳥の足」「ガネ」とあだ名され、いじめられました。真っ直ぐに歩けるようになったのは4年生の3学期であった。

「戦争や原爆の恐ろしさを次の世代に伝えていくことが被爆者の役目」と現在、語り部として活動しています。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢	オンライン講話
田中 安次郎	たなか やすじろう	3歳	対応可

爆心地から約3.4km離れた長崎市東部の新中川町で被爆しました。

その日、自宅そばの路上で祖母、妹、近所の友達と遊んでいましたが、突然ものすごい光を浴びて、被爆しました。

爆心地から0.5km離れた城山小学校に植えられた「かよこ桜」(林嘉代子さん・15歳で爆死)の母親の思いを伝えるため、「かよこ桜・親子桜を広める会」を立ち上げ、全国へ植樹活動を行い、平和を訴えています。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢	オンライン講話
森内 實	もりうち みのる	8歳	対応可

爆心地から約4.8km離れた西彼杵郡長与町で、大きな柿の木に登ってセミ取りをしているときに被爆しました。

さらに2日後、親戚を捜しに行く母に連れられ、爆心地から0.4km離れた大橋町に行き、入市被爆。

自宅に親戚6名が避難してきたが、急性症状を起こし、全員亡くなりました。

原爆認定集団訴訟(全国306名・2011年終結)の長崎原告団長を務めました。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
森田 宏	もりた ひろし	10歳

爆心地から2.6km離れた自宅近くの畑で母と被爆しました。母の「防空壕に入れ」の声を無視して遊んでいたため、爆風で飛ばされ、畑の石垣にたたきつけられました。母も同じように石垣まで吹き飛ばされました。私は大きなけがはしなかったが、母のけがはひどく、治るのに時間がかかり、後年、原爆症の疑いそのまま亡くなりました。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
溝浦 勝	みぞうら まさる	4歳

爆心地から3.4kmの長崎市飽の浦町で被爆。近所の友達や4歳上の兄と家の外で遊んでいるときに今まで見たことがないようなすさまじい光に驚いて家の中に逃げ込んだ瞬間、爆風に吹き飛ばされました。幸い私も含め家族に大きな怪我はありませんでした。9日夜、長崎市内は火災のため真っ赤な夜空だったことを今でも思い出します。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢	オンライン講話
長野 靖男	ながの やすお	2歳	対応可

爆心地から5kmの福田村(現長崎市福田本町)で、ラジオの空襲警報で足の不自由な母と5歳上の兄と防空壕に避難する途中で被爆。そのとき、母は私に覆いかぶさるように守ってくれていました。その時の土臭い記憶がかすかにあります。戦後は極貧の少年時代を過ごし、戦争のない平和な社会を子どもながらに望んでいました。社会人となり、平和の音楽活動を続ける中で、1985年に被爆者の渡辺千恵子さんと出会い、親交を深め多くの啓示を受けました。自身と、渡辺千恵子さんの被爆体験を語ることで、核兵器の無い平和な世界への希望を伝えたいと思います。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢	オンライン講話
城臺 美弥子	じょうだい みやこ	6歳	対応可

爆心地より2.4km離れた山陰の立山町で被爆。自宅内に居た事で外傷もなく、落ち込んだ床下から助け出された。

その後、金比羅山中腹にあった防空壕で数日過ごし、旧市内が真っ赤に焼けていくのを見た。翌日、敵機が頭上をぐるぐると低空飛行し、恐ろしい記憶として残っているが、後日、被爆後の長崎を偵察にきたと知る。教職在職中、戦争や原爆について充分に伝えられなかったので、今「長崎を最後の被爆地に」と語っている。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
三田村 静子	みたむら しずこ	3歳

爆心地より4km、現在の長崎市福田町附近の自宅縁側で、兄と2人の姉(次女・三女)の4人で食事中に被爆。

そのとき放射性降下物と思われる灰がご飯の上に降りかかり、それを食べてしまった。

後年、一緒にいた2人の姉(三女は死亡)がガンを発病、私も大腸がん、子宮体がんを発症。私の長女もがんで失った。

次女・三女の子(姪)も30代で亡くなった。

自分の体験より放射線の怖さと、ほかの被爆者の方の貴重な体験を継承して核廃絶と平和の尊さを伝えたい。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
今道 忍	いまみちしのぶ	8歳

爆心地から4.5kmの自宅で被爆。

家族に被害はなかったが、数日前に爆心地付近に転居した親友を失う。終戦直後、米兵隊の長崎上陸の噂を恐れ、家族で40km離れた郊外の農家へ疎開途中、爆心地を通過して入市被爆。

2020年4月、癌を患い、尿管と腎臓一つを摘出手術。

残る余生は、若い世代の人々に、悲惨な戦争や残虐極まる原爆の実相を伝え、世界のすべての核兵器廃絶と恒久平和の実現のために、微力を尽くしたい。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
陸門 良輔	むつかどりょうすけ	0歳(胎内被爆)

母のお腹にいるとき(4ヶ月)、爆心地から3.3kmの伊良林1丁目で被爆しました。

私を含め6人兄弟のうち、3人が原爆の影響で亡くなり、私は原爆の影響と思われる難聴が30歳ころから続き、今も悩まされています。

私が両親や兄弟たちから聞いた原爆のこと、そして知人や友人に聞いたことを中心にお話したいと思います。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢	オンライン講話
山川 剛	やまかわ たけし	8歳	対応可

1945年8月9日、国民学校3年生、8歳の時に、爆心地から南に4.3kmの長崎市浪の平町の防空壕前でどろ遊びをしていた時に被爆。

真(ま)っ白く輝いた光がピカッ！ときました。まわりの風景が一瞬消え、今までにない熱さを感じて何が起こったかわからずに防空壕に飛び込みました。

この熱線で顔の左にかるいやけどを負いました。

その夜、見上げる空の半分くらいが真っ赤に染まっていました。

36年間小学校の先生として勤務し、1997年に退職。

2005年から2014年まで活水高校で「長崎平和学」を担当、希望を語る。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
大塚 一敏	おおつか かずとし	10歳

被爆したのは、爆心地から約3kmの新興善国民学校でした。

自宅は全焼、父親は戦死、家族で山手の墓地に逃げ、夜が明けて叔父宅に避難。父の弟夫妻を捜し歩いた三菱製鋼所や自宅は、爆心地近くだったのです。

しばらくして身体に異変が起こり、足の火傷も悪化して特設救護所で治療を受けました。以来、放射線の影響で「生きる苦しみ」を強いられています。

被爆時、一緒に逃げた弟は20数年後に肺壞疽で窒息死、死後解剖された母は執刀医が驚くほど複数の癌、結婚した姉の子は「被爆二世＝原爆症で死亡。長崎で初めて」と報道され、被爆者に衝撃を与えました。残酷です。

核兵器は非人道的で、人類を滅ぼす悪魔の兵器です。禁止・廃絶以外に道はないことを語り継ぎ、次の世代にバトンを渡します。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
田中 重光	たなか しげみつ	4歳

祖父母、母、弟の家族6人で爆心地から約6キロ離れた西彼杵郡時津村(現在の時津町)に住んでいました。

祖父と弟と庭先の柿の木の下で遊んでいたときに被爆。

「じいちゃん、飛行機の音がするばい」といった瞬間、あたり一面が真っ白に「ピカッ」と光った。家の近くに爆弾が落ちたと思い、必死に裏山に避難する途中、大きな爆発音、そして台風よりも強い爆風に襲われました。

幸いに誰も怪我はしませんでした。母は被爆3日後に爆心地に知人が無事かどうかを確かめに入った後、体調を壊し、肝臓や甲状腺の障害で入退院を繰り返し、そのことで母に暴力をふるった父も肝臓がんで亡くなりました。

娘の子は、横隔膜欠損で生まれ、わずか3日間の命でした。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
増川 雅一	ますかわ まさかず	4歳

直前に疎開した現在の赤迫町(=爆心地から3.3km)で被爆。

疎開住居は損壊するも、怪我は頭部打撲のみ。現在の幸町にあった自宅(生家)は全壊・全焼した。

祖父・父は被爆直撃死爆心地から200mの長崎市岡町・現平和公園西側付近)

馬品評会参加途中で、遺体見つからず。

戦後、貧困と病弱で苦難生活を強いられ、進学を断念。

1965年高校卒業後、NBC長崎放送に入社。定年まで勤務。

1978年、「脊髄腫瘍」発症＝長崎大学手術⇒現在まで、種々後遺症続く。

2002年、さだまさし提唱「ピーススフィア員の火運動」に参加。

「ナガサキピースミュージアム」誕生に参画。運営担当⇒現在。

※「被爆者であることを公表」＝マスコミ・”長崎の証言”・ピースボート世界21カ国訪問など。

氏名	ふりがな	被爆当時年齢
八木 道子	やぎ みちこ	6歳

爆心地から3.3kmの鳴滝町で被爆、当時小学1年生(6歳)。家には兄弟弟の5人だけだった。

一瞬にして聞こえなくなった蝉の声、異様な空の色、やけどを負った身体に湧く無数のうじ虫と異臭は、今もはっきり記憶にある。

最後に勤務した城山小学校では、1400名余の児童と先生方が命を失った。「戦争は最大の差別」という。平和とはどういうことをいうのか、考えていきたい。

講話者プロフィール(被爆二世・三世)

氏名	ふりがな	体験を語り継いでいる被爆者
大越 富子	おおごし とみこ	田中竹一(父)、サザ子(母)

父・田中竹一と、母・サザ子の被爆体験を話します。

父は被爆当時44歳で、佐世保の海兵団に所属しており、がれきなどの撤去作業のために長崎市に入りました。被爆から12年後に、肝臓がんで亡くなりました。

母は当時38歳で、9日、疎開先の時津村にて、原爆投下後に近くの国民学校へ運び込まれた被爆者の救護にあたりました。

戦争は愚かな行為です。

絶対にしてはなりません。

戦争によって色々な武器が使われ、それによって命を奪われ、障がい者にもなります。

幸せにはなれません。

特に原子爆弾は遺伝子を傷つけ細胞を破壊します。

被爆者だけでなく、後世に産まれてくる人にも影響が出てくるかもしれない。

被爆者、家族の切実な思いを継承していかなければと、語り部を始めました。

氏名	ふりがな	体験を語り継いでいる被爆者
柿田 富美枝	かきた ふみえ	母、山口仙二(上司)、谷口稜暉(上司)

1993年より長崎原爆被災者協議会事務局員として勤務し、2016年より事務局長。

2012年に被爆二世の会を仲間とともに結成。

戦争のない、核兵器のない世界を実現するために、被爆二世として体験、思いを継承し、次の世代に伝えたいと願う。

長崎市家族交流証言事業に参加し、母の被爆体験と山口仙二氏、谷口稜暉氏などの被爆体験を子どもたちに語る活動をおこなっている。

氏名	ふりがな	体験を語り継いでいる被爆者	
佐藤 直子	さとう なおこ	池田早苗(父)	

父(池田早苗)は、当時12歳。買い出しに行く途中、爆心地から2kmの長崎市小江原町で爆心地から約2kmの場所で被爆した父・池田早苗さんの被爆体験を話します。

父は被爆当時12歳で、母親と買い出しに出かけていたときに被爆しました。

自宅は爆心地から800mのところであり、原爆で姉・妹・弟ら5人を亡くし、その後両親も死亡しました。また、一番下の弟をひとりで火葬しました。